令和５年度入学試験問題（後期日程）

小　　論　　文

初等教育教員養成課程

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

〔問〕次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

日本は進路選択の男女差が大きい国といわれています。特に理工系選択者の女性の数が顕著に少ないのです。また、社会科学（特に法や経済）を選択する女性が少ないことでも知られます。

実際の数字を少し見てみましょう。OECD 諸国を比べた統計によると、工学部卒業生に占める女性の割合が日本では 1 割前後（2014 年は 13%）ですが、2014 年の OECD 諸国平均は 26%、オランダ、アメリカやイギリスなど西洋諸国はいうまでもなく、お隣の韓国も 24%に達しています。理学部に関しては、日本の女子学生比率は 25%であり、OECD 諸国平均が 4 割であるのを考慮すれば最下位グループといえます。

なお、工学部でいえばスイスやドイツ（女子学生率 1～2 割）、理学部ならチリ（21%）、オランダ（27%）、などという国が、理工系の女子学生比率では大体日本と同じ所にいます。

しかし、日本が独特といえるのは、社会科学系学部卒業生についても 39%と女子学生が少ないことです。先に述べた、「日本は進路選択の男女差が大きい」は①この点も踏まえてのことです。スイスやチリのように理工系において女子学生が日本と同様に少ない国であっても、この点は違っているのです。なお、OECD 諸国の平均では社会科学においてはむしろ女子学生の方が多い（6 割程度）ことが知られています。

人文科学系学部に女子学生が多いのは OECD 諸国でも共通ですが、日本は 69%と OECD 平均を上回り、女子学生の占める割合が多い国の一つです。人文科学系に加えて、「サービス系学部」として区分される福祉や家政学の領域に女子学生の比率がとても高いのも日本の特徴です。OECD 平均は 55%であるのに対し、日本では 76%を占めているのです。

②日本は理工系に女性が少ない一方で、市場に結びつきづらい分野である人文科学系、あるいは伝統的に女性が担う傾向のあったケアの領域に、とりわけ女性が多い国なのです。

私は授業で教員としてこの話を何度か扱ったことがあるのですが、授業アンケートでしばしば全く正反対の二つの意見が見られるのは印象的でした。一方に「それが日本の文化なのだから無理に変えなくてもよい」という意見や、「男女で適性が違うとい

うだけのことではないか」という意見があり、他方には「私は文学に興味があったが、親に就職を考えれば法か経済に行けといわれた」（男子学生）、もしくは「理系に進んだが、女の子なのに変わっているといわれた」という趣旨の記述があるのです。

教室もやはり社会の縮図なのでしょう。一方に「そういう文化だから」「男女で向き不向きがあるからこれが自然」と思っている人々がいて、他方には、そのような考えを持つ人々に希望した進路を変えるよう勧められたり、例外的な存在扱いされて戸惑ったりする体験をした人々がいるわけです。

この話題はインターネット上でも議論が多く、なかには高校の教員に理工系進学を諦めるよう誘導されていやだった、差別されているように感じた、との証言を残している例もみられます。先の統計もあわせてネット上のつぶやきを読んでいると、男性だから、女性だから、という思い込みに従い、本人の適性や希望を無視した進路が推奨されている傾向が日本では強いのだろう、と推測できます。だとしたら、③それは不幸なことではないでしょうか。

（出典）隠岐さや香（著）『文系と理系はなぜ分かれたのか』星海社新書、2018 年、pp.156-158（設問の都合により本文の一部を省略している）

（問 1）　下線部①「この点」とは何を指していますか。本文中の言葉を用いて 30 字以内で説明しなさい。

（問 2）　下線部③について、著者は何が不幸だと述べていますか。本文中の言葉を用いて 60 字以内で説明しなさい。

（問 3）　下線部②について、あなたはどのような意見を持ちますか。また、将来学校の教員になったとき、下線部②の実態を踏まえた上でどのような教育を行いたいと考えますか。本文中の言葉を用いつつ、320 字以上 400 字以内で論じなさい。なお、冒頭にあなたの意見を明示すること。